

小さい太郎の悲しみ

新美南吉



お花畑から、大きな虫がいつぴき、ぶうんと空にのぼりはじめました。

からだが重いのか、ゆつくりのぼりはじめました。

地面から一メートルぐらいのぼると、横にとびはじめました。

やはり、からだが重いので、ゆつくりいきます。うまやの角の方へのろのろとゆきます。

みていた小さい太郎たろうは、縁側えんがわからとびおりました。そしてはだしのまま、篩ふるいをもって追っかけてゆきました。

うまやの角をすぎて、お花畑から、麦畑へあがる、草の土堤どて

の上で、虫をふせました。

とつてみるとかぶと虫でした。

「ああ、かぶと虫だ。かぶと虫をとつた」

と小さい太郎はいいました。けれどだれもなんともこたえませんでした。小さい太郎は兄弟がなくてひとりぼっちだったからです。ひとりぼっちということはこんなときたいへんつまらないと思います。

小さい太郎は縁側えんがわにもどつてきました。そしておばあさんたろうに、

「おばあさん、かぶと虫をとつたとみせました。」

縁側にすわつていねむりしていたおばあさんは、眼めをあいてかぶと虫をみると、

「なんだ、がにかや」

と行って、まためをとじてしまいました。

「ちがう、かぶとむしだ」

と小さい太郎は口をとがらしていいましたが、おばあさんには、かぶと虫だろうが蟹かにだろうが、かまわないらしく、ふんふん、むにやむにやといつて、ふたたび眼めをひらこうとしませんでした。

小さい太郎は、おばあさんの膝ひざから糸ぎれをとって、かぶと虫のうしろの足をしばりました。そして縁板えんいたの上を歩かせました。

かぶと虫は牛のようによちよちと歩きました。小さい太郎が糸のはしをおさえると、まえへ進めなくて、カリカリと縁板をかきました。

しばらくそんなことをしていましたが、小さい太郎はつまらなくなってきました。きつと、かぶと虫にはおもしろい遊び方があるのです。だれか、きつとそれを知っているのです。

二

そこで小さい太郎たろうは、大頭に麦わら帽子ぼうしをかぶり、かぶと虫を糸のはしにぶらさげて、かどぐちを出てゆきました。

ひるはたいそうしずかで、どこかでむしろをはたく音がしているだけでした。

小さい太郎は、いちばんはじめに、いちばん近くの、桑畑くわばたけの中の金平きんぺいちゃんの家へゆきました。金平ちゃんの家には七面

鳥を二羽わかっついていて、どうかすると、庭に出してあることがありました。小さい太郎はそれがこわいので、庭まではいつてゆかないで、いけがきのこちらからなかをのぞきながら、「金平ちゃん、金平ちゃん」

と小さい声でよびました。金平ちゃんにだけ聞こえればよかったです。七面鳥にまで聞こえなくてもよかったです。なかなか金平ちゃんに聞こえないので、小さい太郎はなんどもくりかえしてよばねばなりませんでした。

そのうちに、とうとううちの中から、

「金平きんぺいはのオ」

と返事がしてきました。金平ちゃんのお父さんのねむそうな声でした。「金平は、よんべから腹はらがいとうてのオ、ねておるだで、今日きょうはいっしよに遊べんぜエ」

「ふうん」

と聞こえないくらいかすかに鼻の中でいって、小さい太郎は  
いけがきをはなれました。

ちよつとがっかりしました。

でも、またあしたになつて、金平ちゃんのお腹なかがなおれば、  
いっしょに遊べるからいいと思ひました。

三

こんどは小さい太郎は一つ年上の恭一君きよいちくんの家にゆくことに  
しました。

恭一君の家は小さい百姓家ひやくしやうやでしたが、まわりに、松や椿つばきや



柿かきや椽とちなどいろんな木がいつぱいありました。恭一君は木登りがじょうずでよくその木にのぼっていて、うかうかと知らずに下を通ったりすると、樅の実を頭の上に落としてよこして、おどろかすことがありました。また木にのぼっていないときでも恭一君はよく、もののかげや、うしろから、わつと行ってびっくりさせるのでした。ですから小さい太郎は、恭一君の家の近くにくると、もう油断ゆだんができないのです。上下左右、うしろにまで気をつけながら、そろりそろりとすすんでゆきます。

ところがきょうは、どの木にも恭一君きょういちくんはのぼっていません。どこからも、わつと行ってあらわれてきません。

「恭一はな」と、鶏にわとりに餌えきをやりに出てきたおばさんが、きかしてくれました。「ちよつとわけがあつてな、三河みかわの親類へ

昨日、あずけたただがなきのう

「ふうん」

と小さい太郎は聞こえるか聞こえないくらいに鼻の中でい  
ました。なんということでしょう！ なかのよかつた恭一君  
が、海の向こうの三河のある村にもらわれていつてしまった  
というのです。

「そいで、もう、もどつてきやしん？」

と、せきこんで小さい太郎はききました。

「そや、また、いつかくるだらあずに」

「いつ？」

「盆ぼんや正月にやくるだらあずにな」

「ほんとだね、おばさん、盆と正月にやもどつてくるね」

小さい太郎はのぞみを失いませんでした。盆にはまた恭一

君と遊べるのです。正月にも。

## 四

かぶと虫を持った小さい太郎たろうは、こんどは細い坂道をのぼって大きい通りの方へ出てゆきました。

車大工さんの家は大きい通りにそってありました。その家の安雄やすおさんは、もう青年学校にいつているような大きい人です。けれどいつも小さい太郎たちのよい友だちでした。陣じんとりをするときでも、かくれんぼをするときでもいつしよに遊ぶのです。安雄さんは小さい友だちからとくべつにそんけいされていました。それは、どんな木の葉、草の葉でも、安

雄さんの手でくるくるとまかれ、安雄さんのくちびるにあてると、ぴいと鳴ることができたからです。また安雄さんはどんなつまらないものでも、ちよつと細工をして、おもしろいおもちゃにすることができたからです。

車大工さんの家に近づくとつれて、小さい太郎の胸は、わくわくしてきました。安雄さんがかぶと虫で、どんなおもしろいことを考え出してくれるか、と思ったからです。

ちようど、小さい太郎のあごのところまである格子こうしに、くびだけかせて、仕事場の中をのぞくと、安雄さんはおりました。おじさんとふたりで、仕事場のすみの砥石といしでかなはの刃はをIといでいました。よくみるときようは、ちゃんと仕事着をきて、黒い前だれをかけています。

1 「刃を」は底本では「刃を」

「そういうふうに入力を入れるんじやねえといったら、わからん奴やつだな」

とおじさんがぶつくさいいました。安雄やすおさんは刃はの<sup>2</sup>とき方をおじさんに教わっているらしいのです。顔をまつかにしてい一生けんめいにやっています。それで、小さい太郎たろうの方をいつまで待ってもみてくれません。

とうとう小さい太郎はしびれをきらして、

「安さん、安さん」

と小さい声でよびました。安雄さんにだけ聞こえればよかったです。

しかし、こんなせまいところではそういうわけにはいきません。おじさんがききとがめました。おじさんは、いつもは

<sup>2</sup> 「刃の」は底本では「刃の」

子どもにむだ口なんかきいてくれるいい人ですが、きようは、何かほかのことで腹はらを立てていたとみえて、太い眉根まゆねをぴくぴくと動かしながら、

「うちの安雄はな、もう今日きょうから、一人前いちにんまえのおとなになったでな、子どもとは遊ばんでな、子どもは子どもと遊ぶがええぞや」

と、つつばなすようにいいました。

すると安雄さんが小さい太郎の方をみて、しかたないように、かすかに笑わらいました。そしてまたすぐ、じぶんの手先に熱心な眼めをむけました。

虫が枝から落ちるように、力なく小さい太郎は格子こうしからはなれました。

そしてぶらぶらと歩いてゆきました。

五

小さい太郎たろうの胸むねにふかい悲しみがわきあがりました。

安雄やすおさんはもう小さい太郎のそばに帰つてはこないのです。

もういつしよに遊ぶあしたことはないのです。お腹なかがいたいなら明日

になればなおるでしょう。三河みかわにもらわれていったつて、い

つかまた帰つてくることもあるでしょう。しかしおとなの世

界にはいった人がもう子ども、世界に帰つてくることはない

のです。

安雄さんは遠くにいきはしません。同じ村の、じき近くに  
います。しかし、きようから、安雄さんと小さい太郎はべつ、

の、世界にいます。いっしょに遊ぶことはないのです。

もう、ここにはなんにもものぞみがないのです。小さい太郎の胸には悲しみが空のようにひろくふかくうつろにひろがりました。

ある悲しみはなくことができます。ないで消すことができます。ます。

しかしある悲しみはなくできません。ないたって、どうしたって消すことはできないのです。いま、小さい太郎の胸にひろがった悲しみはなくことのできない悲しみでした。そこで小さい太郎は、西の山の上の一つきり、ぽかんとある、ふちの赤い雲を、まぶしいものをみるように、眉まゆをすこししかめながら長いあいだみているだけでした。かぶと虫がいつか指からすりぬけて、にげてしまったのにも気づかない







底本：「新美南吉童話集 2 おじいさんのランプ」大日本図書

1982（昭和 57）年 3 月 31 日初版第 1 刷発行

1996（平成 8）年 2 月 15 日初版第 7 刷発行

※表題は底本では、「小さい太郎《たろう》の悲しみ」となっています。

※誤植を疑った箇所を、「牛をつないだ椿の木」大和書店、1943（昭和 18）年 9 月発行の表記にそって、あらためました。

入力：江村秀之

校正：諸富千英子

2018 年 2 月 25 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫  
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。